中国語における中間構文のカテゴリー化

顧 彬楠

DOI: 10.18999/stul.37.19

1. はじめに

「中間構文」(the Middle Constructions)の典型例として、His novels sell very well のような文がよく挙げられる。当該構文の特徴について見ると、話し手の視点が動作の対象に置かれる点は受動文と似ているが、述語動詞がヴォイスマーカーを伴わない点では能動文との共通点が見られる(Keyser&Roeper1984、Fellbaum1985、Klaiman1991、Fagan1992、Kemmer1993、Rosta1995 等参照)。一方、中国語の中間構文について、次の“V 起来”構文が最も多く論じられている(Sung1994、何文忠 2005、Han2007、周晓岩・高腾 2007、余光武・司惠文 2008、熊学亮・付岩 2013 等参照)。

(1)蔬菜面包吃起来像塑胶。 (彼得梅尔《有关品味》BCC)

(2)这首曲子弹奏起来很动人。 (微博 BCC)

例(1)と例(2)では、主語名詞“蔬菜面包”と“这首曲子”はそれぞれ動詞“吃”と“弹奏”の意味上の目的語であるが、動詞自体はヴォイスマーカーを伴わない。このように、“V 起来”構文は英語の中間構文と類似する特徴が多く見られるため、当該構文は中国語の最も典型的な中間構文として認識されている。また、“V 起来”構文における“起来”以外にも、動詞 V に後置されるものに関して、“只要能具体刻画出动作进程，又与主语 NP 的性质表达不冲突的，都能进入到这种句子里”(蔡淑美・张新华 2015:206)という指摘もある。先行研究の指摘によると、例(3)～(5)のような“上去”、“下去”、“一口”、“完”などを用いる文も中間構文に含まれる。

(3)医患沟通<u>看上去</u>简单，如何做到并长期<u>坚持下去</u>很难。 (《人民日报》BCC)

(4)自己做的蛋糕,<u>吃一口</u>可香了。 (微博 BCC)

(5)冰淇淋真的很治愈,<u>吃完</u>觉得很满足很开心。 (微博 BCC)

記述の便宜上、動詞 V とその後ろの補語の組み合わせを VC で示す。また、主語 NP の属性を表す部分は形容詞句以外、例(5)“觉得很满足很开心”のような動詞句が用いられる場合もある。本稿では、NP の特徴を表す形容詞句と動詞句を分けて分類せず、VC に後続する形容詞成分と動詞成分を一律に VP で表示する。以上、本稿では NP+VC+VP という形式を用いて、上記の例(3)～(5)が示すような構文を表す。

NP+VC+VP 構文以外にも、例(6)の受身マーカーを伴わない受事主語文（Ting2006、高秀雪 2011）、例(7)の“给”構文（沈阳・司马翎 2010）、例(8)の“NP＋能 / 可以+VP”構文（蔡淑美・张新华 2015）、例(9)の“NP＋可 V / V 人 / 难 V / 好 V”構文（古川裕 2005）、例(10)の“耐 / 抗 / 经”構文（蔡淑美・张新华 2015）といった文もよく中間構文として挙げられている。

(6)燕麦粥有点煮糊了。（《读者》CCL）

(7)小树给长歪了。（微博 BCC）

(8)这支笔还可。（微博 BCC）

(9)政治看法是很可笑的。（《李敖对话录》CCL）

(10)帆布结实耐磨。（《世界 100 位富豪发迹史》CCL）

これまでの先行研究では、英語の中間構文の基準に基づき、中国語における中間構文の範疇に関して、どのようなタイプの構文が当該範疇に含まれるのか、どのようなタイプの構文が当該範疇に含まれないのかといった指摘が圧倒的に多く見られる。本稿では、このような先行研究とは異なり、プロトタイプ効果を提唱する認知言語学的カテゴリー観から、中国語の中間構文を一つのカテゴリーとして捉え、そのプロトタイプに当てはまる事例及び、プロトタイプから逸脱していると見なされる事例について考察を試みる。そのため、これからはまず、中間構文の特徴を明らかにする際に用いられるアクション・チェインの概念を説明する。次に、この理論に基づいて中間構文のアクション・チェインを図式化することで、中間構文の形式的及び意味的特徴を明らかにする。

2. アクション・チェインから見た中間構文

認知言語学の角度から見ると、言語は人々の日常生活におけるコミュニケーションのツールのみならず、人間の客観的世界に対する認識を反映する手段でもある。人間と客観的世界とのインタラクションにおいて、エネルギーの伝達は不可欠なものである。このような

「エネルギーの伝達」は言語にも存在する。ある事態がどのように言語化されるのか、また言語化される際にどのような特徴があるのかは、すべて事態の参与者間のエネルギー伝達における特徴による。この「事態の参与者間のエネルギー伝達によって、その事態描写の特徴を説明する」モデルは、認知言語学でよく用いられるアクション・チェイン（action chain）である。そして、中間構文のアクション・チェインについて、Langacker2014:228 は以下の図 1 で示すことができると指摘している。

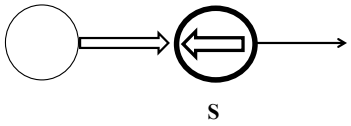

図 1　中間構文のアクション・チェイン（Langacker2014:228）

図 1 の中間構文のアクション・チェインでは、プロファイルされるのは主語として選ばれる被動作主 S だけである。二重矢印が示すように、被動作主 S は一種のエネルギーを発して、動作主からのエネルギーに抵抗する（またはそのエネルギーを促進する）。被動作主は意図的にエネルギーを発したわけではないにもかかわらず、この抵抗力（或いは促進力）はある程度被動作主が動作主のように働く機能を与えている。

以上の中間構文のアクション・チェインから分かるように、能動文や受動文とは異なり、中間構文では、被動作主主語という参与者が動作主からのエネルギーを受けると同時に、被動作主自身からもエネルギーを発することができる。これは中間構文の最も重要な特徴であると考える。

以下では、英語の中間構文の特徴を参照しながら、Langacker2014 が指摘した中間構文の事態認知（図 1）を基盤として、より詳しく中間構文のアクション・チェインを描く。Langacker2014:228 の指摘によると、被動作主 S は一種のエネルギーを発して、動作主からのエネルギーに抵抗するか、またはそのエネルギーを促進する。このように、被動作主が動作主からのエネルギーに抵抗または促進することにより、中間構文のアクション・チェインは更に図 2 と図 3 で示されるように二つのケースに分けることができる。

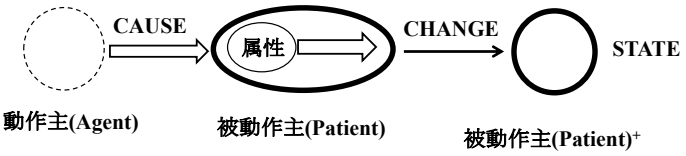

図 2 中間構文のアクション・チェイン（促進する場合）

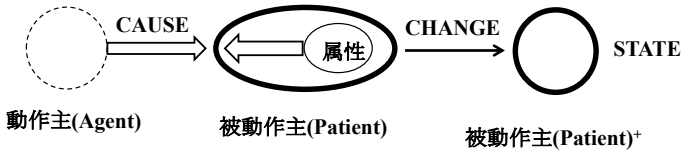

図 3 中間構文のアクション・チェイン（抵抗する場合）

上で分析したような中間構文のアクション・チェインから見ると、形式的には、中間構文は「エネルギーの伝達がある動的事態」と「被動作主主語の属性を表す事態」という二つの部分から構成されている。具体的には以下のように示すことができる。

1）非明示的動作主から被動作主主語に働きかける。

2）被動作主主語の有する属性が動作行為の発生を促進（または抵抗）し、そして、その動作行為を描写することにおいて、主語の属性にも言及する。

また、意味的には、中間構文は主語の属性を描写する文であり、被動作主主語が持っている属性が非明示的動作主からの行為に抵抗する（或いは促進する）ことが、中間構文の成立を促成するという点において、中間構文は他の構文との相違が見られる。

次節では、中間構文のアクション・チェインに基づき、先行研究で挙げられてきた疑似中間構文[1]をまとめた上で、これらの構文のアクション・チェインを描きながら、それぞれの特徴を明らかにする。

3. 中国語における疑似中間構文の特徴及びアクション・チェイン

3.1 NP＋VC＋VP 構文

NP+VC+VP 構文は、例（11）と例（12）が示すような異なる性質を持つ二つのタイプに分けることができる。

（11）繁体字和竖排版看起来真的很费劲儿。（微博 BCC）

（12）他的理由看起来“迂腐”，但很充分。（《科技文献》BCC）

例（11）と例（12）は共に知覚動詞“看”を用いるが、例（11）の“看起来”における“看”は、実際に「読む」という動作を表す一方、例(12)の“看起来”における“看”という動詞は、実際に「見る」という動作とはあまり関わらず、実義を失っている。つまり、例（12）のような例におけるVCの意味は虚化しており、話し手の推測を表すだけである。本研究は

[1] 「疑似」という表現を使用するのは、先行研究で中間構文であるとみなす構文は、本研究では中間構文であるかどうかにはまだ議論の余地があるのである。

NP+VC+VP構文を例(11)のようなVCの意味が虚化していないケースと例(12)のようなVCの意味が虚化しているケースを分けて考察する。次節では、まず VC の意味が虚化していないケースについて分析する。

3.1.1 VC が虚化していないケース

当該事例としては、次の例(13)～(16)のようなものが挙げられる。

(13)那些瓜吃起来又粗又淡，很为江南人所鄙视。　　(余秋雨《山居笔记》BCC)

(14)这场比赛拿下真不容易。　　(微博 BCC)

(15)罐子摸上去凉凉的，感觉很重。　　(扬・马特尔《少年 Pi 的奇幻漂流》BCC)

(16)声音不大，非常温柔，听来很舒服。　　(微博 BCC)

まず、例(13)と(14)につい見ると、形式的には、主語になるものは、V が表す動作行為の対象である。VC(“吃起来”、“拿下”)は具体的な意味を持つ動作行為であり、被動作主はこれらの動作行為によって影響されるため、「エネルギー伝達がある」という動的事態の存在が認められる。そして、VP (“又粗又淡”、“真不容易”) は主語の属性に関する評価性成分を表しているため、「主語の属性を表す」事態が存在すると考える。例えば、例(14)において、“拿下比赛”という動作行為には「エネルギーの伝達がある動的事態」が含まれており、この動作行為を描くことにおいて、主語“这场比赛”の属性(例えば、「試合の時間が長い」、「相手チームが強い」といった属性)にも言及されている。さらに、主語“这场比赛”が持っている属性が、動作行為“拿下比赛”に抵抗することにより、“真不容易”という主語の属性に対する評価が表されている。つまり、当該構文には、「主語の属性が事態を誘発する」という特徴が含まれている。

一方、例(15)と(16)のような知覚動詞が用いられる NP+VC+VP 構文では、VC の表す動作行為には「エネルギーの伝達」が存在するかどうかにつて異なる議論が見られる。例(15)の“摸”は手で物体に接触して感じ取ることを表し、例(16)の“听”は耳で音声に接触して感じ取ることを表している。付岩・陈宗利 2017 では、このような「＋接触」の意味要素を持つ知覚動詞は「動作」の意味が失われ、ある程度で虚化しいるため、中間構文ではないと指摘されている。確かに、“摸”、“听”のような知覚動詞の表す動作行為は他動性が弱く感じ取れ、NP+VC+VP 構文の文頭に置かれる被動作主主語自身は、これらの知覚動詞の表す動作行為から影響を受けていない。しかしながら、これらの動作行為を通して、話者の主語の属性に対する評価が生じる。例えば、“罐子摸上去凉凉的”では、“摸”と

いう動作行為が行われることにより、被動作主主語“罐子”に対して“凉凉的”という評価が生じる。本研究は、被動作主が動作行為から影響を受けたかどうかを判断する際に、被動作主主語に対する評価が「無」から「有」へ変化することも「影響を受けた」と見なす。したがって、知覚動詞が用いられる NP+VC+VP 構文においても、VC の表す動作行為には「エネルギーの伝達」が存在すると考えられる。以上の分析を踏まえ、VC の意味が虚化していない NP+VC+VP 構文のアクション・チェインを一般化すると、次の図 4 のようになる。

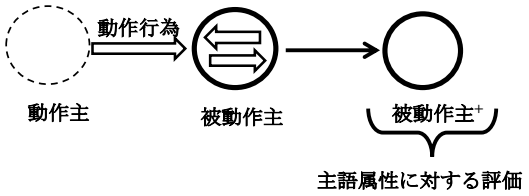

図 4　NP+VC+VP 構文のアクション・チェイン

当該構文が構成される過程において、動作行為を行う動作主は言語化されていないため、虚線で表示される。主語の位置に置かれる被動作主はプロファイルされるため、太線で示される。被動作主にある二つの方向の二重矢印は、「主語の属性が動作主からの動作行為を促進する（或いは抵抗する）ことによって、事態を誘発する」ことを表す。また、「主語の属性に対する評価」が充てられる VP が表す「評価義」がプロファイルされるため、太線で強調される。

3.1.2 VC が虚化しているケース

VC の意味が虚化している用例の中では、“V 起来”が最も多く挙げられている。例えば、次の例（17）～（21）が示すように、同じく“算起来”、“想起来”、“说起来”、“看起来”、“听起来”を用いる NP+VC+VP 構文においても、VC の意味が虚化していないものと虚化しているものの間で VC の意味と文法機能には相違が見られる。

（17）a. 这道数学题<u>算起来</u>很难。

b. 环个子小，<u>算起来</u>属于丰满的。　（村上春树《1Q48》BCC）

（18）a. 那时的情形现在<u>想起来</u>也令人毛骨悚然。

b. 这里边<u>想起来</u>可大有文章啊！　（吴为善 2012:5）

（19）a. 自己的母语<u>说起来</u>很轻松。

b. 薪水<u>说起来</u>也不算少，已经可以了。　（陈美琳《特种情妇》BCC）

（20）a. 这个图表<u>看起来</u>很费劲儿。

b. 情况看起来不妙。　　（詹姆斯・莱德菲尔德《塞莱斯廷预言》BCC）

(21)a. 她的歌声听起来很优美。

b. 他听起来不再那么高兴了。　　（索菲・金塞拉《家政女王》BCC）

例(17a)～(21a)では、“V 起来”における動詞 V は、それぞれ「計算する」、「思い出す」、「話す」、「見る」、「聞く」という意味を表している。動詞 V は具体的な動作行為を表し、本来の意味が保留されている。一方、例(17b)～(21b)では、“V起来”における動詞Vの意味は虚化しており、いずれも「推測」の語気を表している。こうした“V 起来”の用法に関する先行研究では、「“起来”は“说、看、听、算、想”の後ろに付加されることにより、「推測」の語気を強めることができる(吕叔湘 1982)」ことがしばしば指摘されてきた。また、この場合、“V 起来”は「挿入句」[2]として、主語に後置されるケースの他に、例(22)のように文頭に置かれることもできる。この類の「挿入句」は状況に対する「見積もり」を表しており、発話者の主観的な考え方、見方、態度が含意されていると考えられる。

(22)a.算起来，环个子小，属于丰满的。

b.想起来，这里边可大有文章啊！

c.说起来，薪水也不算少，已经可以了。

d.看起来，情况不妙，我们得离开这儿。

e.听起来，他不再那么高兴了，而是非常紧张。

VCの意味が虚化されていないNP+VC+VP構文と区別するために、本稿ではVCの意味が虚化されているNP+VC+VP 構文を NP+(VC)+VP 構文と表記する。当該構文が表す事態のアクション・チェインを一般化すると、図5のようになる。NP+(VC)+VP 構文が構成される過程において、VC は具体的な動作行為を表さない。動作主から被動作主への働きかけは設定されていないため、言語化されていない動作主及び動作行為を虚線で示す。「主語の属性に対する評価」が充てられる VP が表す「評価義」がプロファイルされることから、NP+(VC)+VP 構文では、NP に対してどのように評価されるのかが最も強調されるところである。

[2] 劉月華1991:541の指摘によれば、「挿入句」とは,文の主語や述語、目的語、定語、状語、補語ではなく、また文中の各成分と構造上の関係を持つことがない要素である。例えば、“这件事，依我说，就算了吧”という文における“依我说”は挿入句であり、文の構造上では、必須の成分ではなく、情報伝達の際に一定の役割(モダリティ形式或いは証拠性形式)を果たしている。

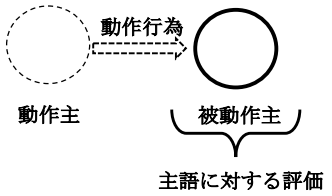

図 5　NP+（VC）+VP 構文のアクション・チェイン

3.2 受事主語文

次のような主語が動作行為の対象でありながら、受け身マーカーのない受事主語文は、中間構文として扱われる研究も多く見られる。

(23)我带来的花生已经吃完了。　（杨志军《藏獒 1》BCC）

(24)多萝茜还有一件衣服，恰巧洗干净了。　（弗兰克・鲍姆《绿野仙踪》BCC）

例(23)と(24)では、動作行為を発する動作主は非明示的であるが、“吃”、“洗”といった動作行為は人によって行われるものであることから、動作主の存在が含意されていると言える。VP が“吃完”、“洗干净”のような動補構造の形を用いているため、これらの行為を表すアクション・チェインには「被動作主は動作行為を受けて、状態変化が生じる」という部分が存在する。これらの点は、NP+VC+VP 構文と一致している。しかし、例(25b)と例(26b)が示すように、意味上の受動文では主語と述語の間に“被”を加えても文が成立する一方で、NP+VC+VP 構文では主語と述語 V 起来の間に“被”を加えると、非文となる。

(25)a.我带来的花生已经吃完了。

b.我带来的花生已经被吃完了。

(26) a.那些瓜吃起来又粗又淡。

b. *那些瓜被吃起来又粗又淡。

NP+VC+VP 構文とは異なり、意味上の受動文のアクション・チェインは以下の図 6 で解釈することが可能である。意味上の受動文では、被動作主と被動作主に起こった変化がプロファイルされている。虚線で表す動作主は相対的に背景化され、言語化されていない。

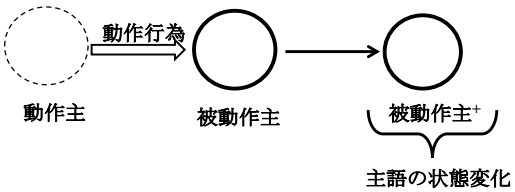

図 6　意味上の受動文のアクション・チェイン

中間構文とは異なり、意味上の受動文における主語はエネルギーの受け手であるが、エネルギーの源(エネルギーを発する動作主)としては認識されない。故に、意味上の受動文では、受事主語の前に“被”を加えることができる。両構文ともに被動作主主語の変化に焦点が置かれているが、意味上の受動文は、被動作主主語が動作行為を受けた後の結果状態の変化を強調し、文全体が実際に起こったある活動・イベントを表す表現である。

しかし、属性、活動及び状態という三つのカテゴリーは連続しており、三者間の境界は極めて曖昧であるため、活動と状態の描写から属性を読み取ることができるケースも多い。張黎 2012 では、属性、活動や状態は、互いに関連している連続する範疇を構成すると述べられている。三者の関係は図 7 のように示すことができる。

活動/変化 ——— 状態（臨時的状態/恒常的状態）———属性/性質 →

図 7 属性と活動や状態との関係

図7から分かるように、臨時的状態は活動に近い一方、恒常的状態は属性に近い。すなわち、矢印の方向に行けばいくほど、典型的な属性に近いということである。例えば、

(27)他去过一次中国。

(28)他对中国很熟悉。

(29)他是中国通。

（例 27～29 は张黎 2012:22 からの引用による）

例(27)において、動詞“去”がアスペクト助詞“过”と組み合わさることによって、一回発生したことがある過去のことが表されている。我々はこの一回の行為から“他”に備わる「中国へ行った経験がある」という臨時的属性を読み取れる。一方、例(28)は前置詞構造“对＋N＋AP”から成る構文であり、動作行為というより、主語“他”の「中国に詳しい」という恒常的状態が表されている。この恒常的状態は属性に近いと言える。そして、例(29)は判断動詞“是”からなる動詞述語文“A 是 B”であり、B は A の属性を表している。つまり、例(29)では、“中国通”が“他”の属性を表している。

以上、属性や活動、状態という三つの概念には、相互に過渡する関係が存在することが分かる。例えば、例(24)“多萝茜还有一件衣服，恰巧洗干净了”が表すのは、主語「服」が動作「洗う」を受けた後の結果状態(きれいな状態)であるが、この結果状態も主語の属性として理解することができる。このように、受事主語文は、被動作主主語が動作行為を受けた後の状態に重点が置かれているが、この状態から被動作主主語の属性を読み取れる。

3.3 “给 V”構文

沈阳・司马翎 2010 では、“给 V”構文を中間構文と見なす理由として、文中に現れない動作主が読み取れることが挙げられている。

(30)a.米饭给煮糊了。（沈阳・司马翎 2010:231）

b.犯人给跑了。

上で挙げた例文は、「文が表す事態は話し手にとって不如意なことである」ことを表しているが、例(30a)では、「ご飯を作る人のせいで、ご飯が焦げてしまった」という動作主を責めるニュアンスが読み取れることから分かるように、動作主の存在が含意される。一方、例(30b)における動作行為“跑”は主語の“犯人”から発するものであるため、“犯人跑了”のような文は自発的な事態を表している。このような自発的な事態の発生は外力の影響と関わっていないものの、“给”が加えることで、外力の存在を読み取ることができるようになる。例えば、例(30b)では、犯人が逃げたことは、当直員の怠慢と関わることが想定できる。しかしながら、非明示的動作主の存在があるか否かに関わらず、これらの文が表す事態は主語自身の属性とは関係せず、「主語に何か変化が起こったか」について述べている。このように、“给 V”構文のアクション・チェインは以下の図 8 で示すことができる。

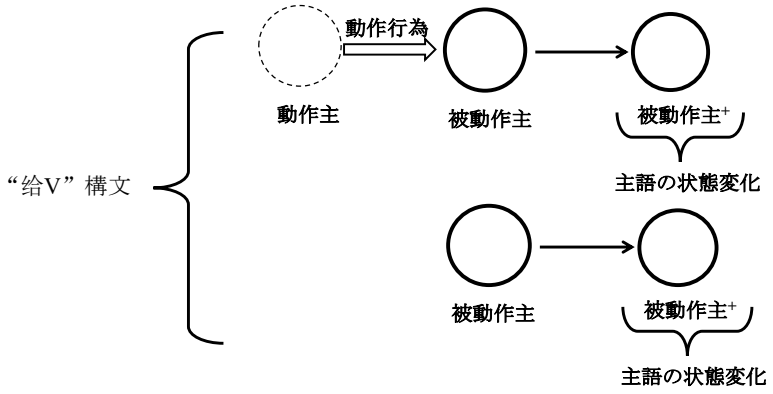

図 8 “给 V”構文のアクション・チェイン

“给 V”構文は例(30a)のような非明示的動作主の存在が含意されるケースと、例(30b)のような非明示的動作主が存在しないケースに分けられる。当該構文は受事主語文と同様に、被動作主主語が動作行為を受けた後の状態に重点が置かれているが、この状態から被動作主主語の属性を読み取れる。例えば、例(30a)“米饭给煮糊了”が描写するのは、受手主語“米饭”が動作行為“煮”を受けた後の結果状態———「焦げている」であるものの、この結果状態も受手主語の属性として理解することができる。

3.4 “能 V/可以 V”構文

(31)羊粪可以肥田，羊肉还可以吃。 (余华《在细雨中呼喊》BCC)

(32)钱能解决很多烦恼。 (微博 BCC)

例(31)～(32)において、“能 / 可以”に後置される動詞句は、主語と意味上では「動作行為ー被動作主」という関係を有しているため、「エネルギーの伝達がある動的事態」が存在することが分かる。これらの用例は、助動詞“能 / 能够 / 可以”を通して、主語の使い道や機能などを表している。“能 V / 可以 V”構文のアクション・チェインは、以下の図 9 のように解釈することが可能である。

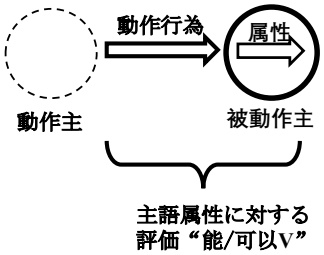

図 9 “能 V / 可以 V”構文のアクション・チェイン

“羊肉可以吃”を例として説明する。“羊肉可以吃”では、“吃”という動作行為は被動作主“羊肉”から発せられるものではないことから、動作主の存在が含意されることが読み取れる。この動作主は非明示的であるため、虚線で示す。被動作主の中にある二重矢印が示すのは、“羊肉”が有する「食べ物の属性」は「食べられる」事態を誘発するということである。つまり、この文が表す事態が可能であるのは、被動作主“羊肉”の属性に起因するためであり、このように文全体を属性描写文として理解することができると考える。また、被動作主主語“羊肉”の具体的な属性(形、味、食感など)について詳しく描写されていないものの、助動詞“可以”を通して、“羊肉”の「食べる」という方面における実現可能性を表している。つまり、“能 V / 可以 V”構文では、被動作主主語が持っているある属性が非明示的動作主からの行為を許容する(“能 / 能够 / 可以”の場合)か、それとも許容しないか(“不能 / 不能够 / 不可以”の場合)が表されている。このように、“能 V / 可以 V”構文では、「主語の属性を表す事態」が助動詞を通して実現されている。しかしながら、“能 V / 可以 V”構文が表す主語の属性は、次の例(33)で示すような NP＋VC+VP 構文と比べると、主語の形や味、食感といったような具体的な属性を描く詳細さにおいて相違が見られる。

(33)羊肉吃起来鲜嫩多汁。

例(33)の“可以吃”からは、主語“羊肉”には食べられるという属性しか読み取れず、

食べ物として具体的にどのような属性（味や食感など）を有するのかは捉えにくい。一方、例(31)では、“鲜嫩多汁”から“羊肉”の属性について、「食べられる」という属性以外にも、味と食感の特徴も捉えることができる。即ち、“能 V / 可 V”構文は主語 NP の属性を表せるものの、NP＋VC+VP 構文が表す属性のように詳しくはないと言えよう。

3.5 難易構文

難易構文は、「あることをするのが容易であるかどうか」を表している。当該構文における“好”、“难”、“容易”は形容詞であるが、動詞の前に現れる場合、常に助動詞のように働く（吕叔湘 1980）、または、助動詞として認識されている（奥田寛 2000、曹宏 2005 等参照）。

(34)我想这问题容易解决。（钱钟书《围城》BCC）

(35)我不会说海南话，而且觉得这种话很难学。（韩少功《马桥词典》BCC）

以上の例文では、“容易 / 难”に後置される動詞（句）は、主語と意味的には「動作行為ー被動作主」という関係を有しているため、「エネルギーの伝達がある動的事態」が存在することが分かる。“容易 / 难”を通して、主語のある動作行為における容易さ（或いは困難さ）という属性が表している。難易構文のアクション・チェインは、以下の図 10 で解釈することが可能である。

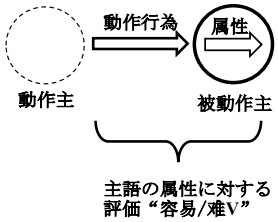

図 10 難易構文のアクション・チェイン

“这问题容易解决”を例として説明する。被動作主“这问题”は“解决”の表す動作行為の対象である。動作行為を行う動作主は存在するが、言語化されていないため、虚線で表される。被動作主の中にある二重矢印は、“这问题”の有する属性が「容易に解決できる」事態を誘発することを示す。“这问题”の具体的な属性について詳しく描写されていないものの、“容易”を通して、被動作主“这问题”の“解决”という方面における属性を表している。つまり、難易構文では、被動作主主語は、非明示的動作主からの行為を容易に行うか、それとも行いにくいかが表されている。

一方、難易構文は以下の“V 起来”構文と置き換えられることが多い。両構文共に「あることをするのが容易であるかどうか」を表すものの、難易構文とは異なり、“V 起来”構文

では「主語の属性を表す事態」が VP の形で言語化されている。

(36)我想这问题解决起来容易。

(37)我不会说海南话，而且觉得这种话学起来很难。

3.6 “耐 V/经 V/抗 V”構文

意味上では、主語は“耐/经/抗”に後置される動詞の被動作主である一方で、被動作主主語の属性は“耐/经/抗”によって表されている。且つ、被動作主主語の属性は誰にとっても恒常的であるため、文全体には総称性が含まれるようになる。

(38)诺基亚抗摔，通话还好。 (微博 BCC)

(39)苹果的电真不耐用！ (微博 BCC)

(40)日本袜子就是经穿。 (梁晓声《感觉日本》BCC)

《现代汉语词典第 7 版》では、以上の例における動詞“耐”“经”“抗”の意味について、以下のように解釈されている。

耐：受得住；禁得起

经：禁受

抗：用肩膀承担物体，引申也就是禁受，受得住

“耐 / 经 / 抗”に後置される動詞は、主語と意味上では「動作行為―被動作主」という関係を有しているため、「エネルギーの伝達がある動的事態」が存在することが読み取れる。“耐 V”“经 V”“抗 V”が表すのは、V という動作行為が行われる際に、主語がその動作に耐えられることである。そして、「この動作行為に耐える」ことは主語が有する属性とも言える。そのため、“耐 V / 经 V / 抗 V”構文におけるアクション・チェインでは、主語の属性を表す事態が含意されている。“耐 V / 经 V / 抗 V”構文のアクション・チェインは以下の図 11 のように解釈することができる。

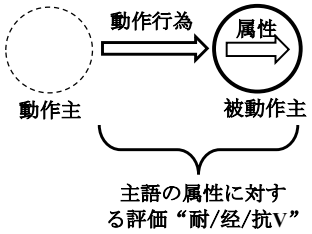

図 11 “耐 V / 经 V / 抗 V”構文のアクション・チェイン

“诺基亚抗摔”を例として説明する。“诺基亚”は動作行為“摔”の動作主ではなく、

被動作主である。“抗摔”における動詞“摔”を発する動作主は言語化されていないため、虚線で示される。“摔”という「動作行為を表す動的事態」が文中に現れているため、この部分は実線で表される。被動作主主語“诺基亚”がどのような属性を有するかがプロファイルされるため、太丸で強調される。意味上では、被動作主主語“诺基亚”が有する属性は、文が表す「ノキアは落とした際に衝撃に強いという属性が現れる」という事態を誘発するため、太丸にある属性を表す二重矢印の方向は動作行為を表す矢印と同じである。つまり、“耐 V / 经 V / 抗 V”構文では、被動作主主語が持っている属性は動作主からの行為を耐えるか（“耐 / 经 / 抗”の場合）耐えないか（“不耐 / 不经 / 不抗”の場合）が表されている。

3.7 “好 V/难 V/可 V/V 人”構文

(41)苦瓜汤真好喝。（迟子建《撕日历的日子》BCC）

(42)我烤的饼总是很难吃。（帕特里克・怀特《人树》BCC）

(43)你的想法真可笑！（左拉《娜娜》BCC）

(44)我不同您讲我的身体状况，这个问题很烦人！（夏多布里昂《墓畔回忆录》BCC）

例(41)と(42)の“好喝”と“难吃”のような“好 V/难 V”型の形容詞における潜在的な動詞“喝”、“吃”は、主に「視力」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚」といったような知覚を表す動詞である。“好 V/难 V”構文では、知覚手段を通して主語の属性に対する評価が表される。一方、例(43)と(44)の“可笑”と“烦人”のような“可 V/V 人”型の形容詞における潜在的な動詞“笑”、“烦”は、人間の喜怒哀楽を表す動詞である。“可 V/V 人”構文では、人間の感情を表す表現によって、主語の属性に対して評価が表される。このように、“好 V/难 V/可 V/V 人”構文におけるアクション・チェインでは、主語の属性を表す事態が存在する。また、“好 V/难 V/可 V/V 人”構文では、「動作行為を表す動的事態」が言語化されていないものの、潜在的な動詞からそれが含意されていることを読み取れる。“好 V/难 V/可 V/V 人”構文のアクション・チェインは、以下の図 12 のように解釈することができる。

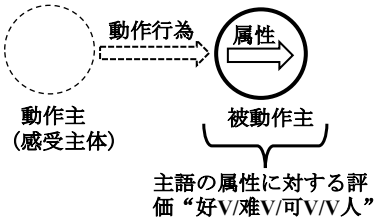

図 12 “好 V/难 V/可 V/V 人”構文のアクション・チェイン

“这个问题很烦人”を例として説明する。主語“这个问题”は“烦”の動作主ではなく、被動作主(感覚を受ける対象)である。“烦人”は“令人烦”(人を悩ませる)の意味を表し、潜在的な動詞“烦”を発する動作主(感覚主体)は言語化されていないため、虚線で示される。「非明示的動作主はこの問題に悩む」という「動作行為を表す動的事態」が文中に現れないため、この部分も虚線で表される。被動作主主語“这个问题”がどのような属性を有するかがプロファイルされるため、太丸で強調される。意味的には、被動作主主語“这个问题”が有する属性は、「人を悩ませる」事態を誘発するため、属性を表す二重矢印の方向は動作行為を表す矢印と同じである。

4. プロタイプ理論による中間構文のカテゴリー化

以上、先行研究で指摘されてきた疑似中間構文のアクション・チェイン及び特徴を分析した。これらの構文間には、形式的にも意味的にも相違がある一方で、主語が被動作主である点において関連性も見られる。以下は「カテゴリー化」という観点から、これらの構文をどのように捉えるかについて考察してみる。認知言語学では、カテゴリー化は、「分類する」ことにおいて重要な概念であるとしばしば指摘されてきた(Lakoff1987, Taylor1989,2003)。認知言語学的カテゴリーは、プロトタイプ効果を提唱し、「同じカテゴリーに属するメンバーは、同じ性質を共有していなければならない」という古典的カテゴリーとは異なり、メンバーの性質の違いを容認する。Langacker2008 では、カテゴリーは典型的なメンバー(プロトタイプとも呼ばれる)を中心に形成されており、ある目的を持って異なる要素を同一のものとして扱う際に用いられる用語であると定義されている。この典型的なメンバーは、カテゴリーの標準的な事例と見なされ、カテゴリーの中心に位置づけられる。これに対し、非典型的なメンバーはプロトタイプの拡張事例と見なされ、カテゴリーの周辺に位置づけられる。つまり、あるカテゴリーにおいて、各メンバーは、プロトタイプが所有する性質と比較対照されることによって配置される。プロトタイプの性質をより多く満たしたメンバーは、より中心に近い位置に配置され、対応関係が少ないものは中心から遠い位置に配置される。

中間構文を一つのカテゴリーとして研究する際には、まず中間構文の典型例を設定しなければならない。本研究では、中間構文のアクション・チェインを分析した上で、当該構文が持っている性質として、主に①「エネルギーの伝達がある動的事態がある」、②「被動作主主語の属性を表す事態がある」、③「主語が有する属性が事態の発生を促成する」という

三点が挙げられる。第 2 節で指摘したように、主語が持っている属性は非明示的動作主からの行為を抵抗する（或いは促進する）ことが、中間構文の成立を促成するという点において、他の構文と比べて最も重要な相違である。故に、中間構文が持っている性質の中で、①という性質が中間構文の典型性に最も影響すると考える。この性質①によって、主語の属性を表す事態（性質②）とエネルギーの伝達がある動的事態（性質③）も常に要求される。中間構文は主語の属性を描写する構文であるため、性質②は性質③より重要であると考えられる。そのため、典型的な中間構文が有する性質の重要さは上で挙げたように①②③の順位で表すことができる。以下の表 1 は、前節で考察してきた疑似中間構文が持っている性質を、上で挙げたプロトタイプ中間構文の性質と比較対照した結果である。

表 1　疑似中間構文における各メンバーが有する性質

タイプ	構文	プロトタイプの中間構文に見られる性質		
		性質①	性質②	性質③
1	NP＋VC＋VP構文	○	○	○
2	“能V / 可以V” 構文	○	○（使い道・機能などの属性）	○
3	難易構文	○	○（難易度による属性）	○
4	“耐V / 经V / 抗V” 構文	○	○（動作を耐えるかどうか）	○
5	“可V / V人 / 难V / 好V” 構文	○	○（知覚・感情による属性）	含意されている
6	受事主語文	×	含意されている	○
7	“给V” 構文	×	含意されている	○
8	NP＋（VC）＋VP構文	×	含意されている	×

NP＋VC＋VP 構文は、中間構文が有する性質を全て満たしているため、中国語の中間構文というカテゴリーは、NP＋VC＋VP 構文をプロトタイプとして形成されていると考えることができる。これから、NP＋VC＋VP 構文以外の各メンバーの配置について、中心に近いメンバーから、中心から離れる周辺的メンバーまでの順に詳しく説明する。

まず、“能 V / 可以 V” 構文、難易構文、“耐 V / 经 V / 抗 V” 構文について見てみる。この三つの構文は、それぞれ「ある動作行為が行われる際に許容される（或いは許容されない）」、「ある動作行為が容易にできる（或いは行いにくい）」、「ある動作行為が行われる際に耐えられる（或いは耐えられない）」のような動的事態（性質③）を表す。こうした動作行為が行われることによって、主語の属性にも言及されている（性質②）。且つ、当該構文において、主語の属性が事態を誘発する（性質①）。しかしながら、プロトタイプ的な中間構文とは異なり、これらの構文が表す主語の属性の類型は基本的に限定されているため、プロ

トタイプ中間構文と比較して、詳細さに欠けている。このように、“能Ｖ / 可以Ｖ” 構文、難易構文、“耐Ｖ / 经Ｖ / 抗Ｖ” 構文はプロトタイプが所有する三つの性質をすべて有しているが、性質②に制限が見られるため、プロトタイプから遠い位置に配置される。

次に、“可Ｖ / Ｖ人 / 难Ｖ / 好Ｖ” 構文について見ると、当該構文は知覚手段或いは人間の感情を表す表現を通して、主語の属性に対する評価を表す（性質②）。また、このような「文法詞」[3]が述語となる文の表す事態は事件性が弱く、「エネルギーの伝達がある動的事態」は言語化されていないものの、潜在的な動詞に含意されている（性質③）。そして、当該構文において、主語の属性が事態を誘発する（性質①）。このように、“可 Ｖ / Ｖ 人 / 难Ｖ / 好 Ｖ” 構文は、性質①と性質②を有しているが、性質③が言語化されていない（含意のみ）ため、中心のプロトタイプからさらに遠い位置に配置される。

また、受事主語文と“给Ｖ” 構文については、両構文が表す事態は事件性が強く（性質③）、ともに被動作主主語が動作行為を受けた後の状態に重点が置かれているものの、この状態から被動作主主語の臨時的属性を読み取れる。且つ、当該構文の表す事態はいずれも主語の属性と関わっておらず、非明示的動作主の責任であるため、典型的な中間構文の最も重要な性質①を有していない。このように、プロトタイプ中間構文が所有する性質のうち、性質③のみを満たしているため、受事主語文と“给 Ｖ” 構文は、“可 Ｖ / Ｖ 人 / 难Ｖ / 好Ｖ” 構文より離れた位置に配置される。

最後に、NP＋(VC)＋VP 構文について説明する。当該構文は主語の状態を表しており、形式上 VC は虚化していない NP＋VC＋VP 構文と同じであるが、VC が具体的な動作行為を表さないため、「エネルギーの伝達がある動的事態」（性質③）を表し得ない。即ち、動作行為が含まれていないため、NP＋(VC)＋VP 構文は性質①を有していないと考える。ただし、NP＋(VC)＋VP 構文は主語の状態を表しており、この状態から主語の属性を読み取れる。このように、NP＋(VC)＋VP 構文は、中心のプロトタイプから最も離れた位置に配置されるべきであると考えられる。

上記のように、中心からの位置が異なるメンバーの配置の仕方は、それぞれのメンバーの性質の違いを容認しているというプロトタイプ理論の特徴を表している。また、プロトタイ

[3] 古川2005は、語構成の角度から、このような“好Ｖ/难Ｖ/可Ｖ/Ｖ人” 型の形容詞を文法と語法の間に位置する“句法词”（文法詞）と呼ぶ。古川2005では、これらの文法詞におけるＶは語彙化を経て、主体名詞（動作主、感覚主体）を取る機能を失っており、客体名詞しか取れない一価形容詞になると指摘されている。そのため、これらの文法詞が述語となる際に、中間構文を構成することがより容易であると述べている。

プ理論のもう一つの特徴として、「各カテゴリーの境界線は明確ではない」ことがよく挙げられる（Rosch&Lloyd1978、Lakoff1987 等参照）。古典的カテゴリー理論と認知言語学的理論における各カテゴリーの境界線の相違を以下の図 13 で示す。

図 13　認知言語学的カテゴリー観と古典的カテゴリー観の相違（李在鎬 2010:62）

図 13 が示すように、認知言語学的カテゴリーでは、各メンバーの帰属の有無は連続的なものとして捉えられている。このような特徴は中間構文というカテゴリーにおいても反映されている。これまでの代表的な先行研究では、中国語における中間構文の範疇に関して、どのようなタイプの構文が当該範疇に含まれるのか、どのようなタイプの構文が当該範疇に含まれないのかといった指摘が圧倒的に多かった。しかしながら、中間構文は一つのカテゴリーとして、その中のメンバーがどのカテゴリーに属するかを明確に決めることができない。例えば、“米饭煮糊了”のような受事主語文と“米饭给煮糊了”のような“给 V”構文は、受事主語“米饭”が動作行為“煮”を受けて、“糊了”という結果状態が生じることを表す。“煮”という具体的な行為はすでに実現した行為であるため、属性の意味はそれほど強く読み取れず、事件性が強い構文であると言える。そのため、受事主語文と“给 V”構文は中間構文と見なすことができると同時に、事象叙述受動文として捉えることもできると考える。また、“这个问题很烦人”のような“好 V/难 V/可 V/V 人”構文における V の前には、程度副詞が付加されることが非常に多いため、“好 V/难 V/可 V/V 人”は形容詞の性質を有するものとして一語化されていると見なすことが可能である。古川 2005 の指摘によれば、このような“好 V/难 V/可 V/V 人”は客体名詞しか取れない一価形容詞であると指摘されている。つまり、“好 V/难 V/可 V/V 人”構文は「主語＋形容詞述語」として見なすこともできると考えるため、当該構文は中間構文に入れるべきか、それとも属性叙述表現における形容詞述語文に入れるべきかを明確に決めることができない。このように、中間構文は、事象叙述受動文、属性叙述構文などのカテゴリーとの間に連続性が見られる。これは認知言語学的カテゴリーにおけるカテゴリー間の境界線が極めて曖昧であることも裏付けている。

5. おわりに

本稿は、先行研究で挙げられてきた疑似中間構文のアクション・チェインを描きながら、

各構文の形式的特徴及び意味的特徴を明らかにした。先行研究とは異なり、本稿は中国語における中間構文はNP＋VC＋VP構文をプロトタイプとして形成されているカテゴリーと見なすことを主張した。この中間構文のカテゴリーでは、NP＋VC＋VP 構文がプロトタイプとして中心の位置に置かれ、他のメンバーが「“能 V / 可以 V”構文、難易構文、“耐 V / 经 V / 抗 V”構文」、「“可 V / V 人 / 难 V / 好 V”構文」、「受事主語文、“给 V”構文」、「NP＋(VC)＋VP 構文」という順序で次第に中心から離れていると結論付けた。

［参考文献］

Fagan, S. M. B.1992 *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press

Fellbaum, C 1985 *Adverbs in agentless actives and passives*. CLS: pp.21- 31

Han Jingquan 2007 *Argument Structure and transitivity Alternation*, Doctoral dissertation, City University of Hong Kong

Kemmer, S. 1993 *The Middle Voice*. Amsterdam: John Benjamins

Keyser, S. J., & Roeper, T 1984 On the middle and ergative constructions in English. *Linguistic inquiry*, 15(3) , pp.381-416

Klaiman, M. H. 1991 *Grammatical Voice*, Cambridge University Press

Lakoff, George. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal abput the Mind.* Chicago: University of Chicago Press, London.

Langacker, Ronald W 2014 Settings, Participants, and Grammatical Relations*, In meanings and Prototypes*. Routledge, pp.213-238

Rosta, Andrew 1995 How does this sentence interpret? The semantics of English mediopassives. *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*, pp.123-144

Sung, Kuo-ming 1994 *Case Assignment under Incorporation*, Doctoral dissertation, University of California at Los Angeles.

Taylor, J. R. 2003 *Linguistic categorization*. OUP Oxford

Ting, Jen 2006 The Middle Construction in Mandarin Chinese and the Pre Syntactic Approach Concentric: Studies in Linguistics, 32(1), pp.89-117

奥田宽 2000〈作为助动词的“容易”和“好”〉，《语法研究和探索》（十），商务印书馆，

pp.243-256
蔡淑美・张新华 2015〈类型学视野下的中动范畴和汉语中动句式群〉，《世界汉语教学》第 2 期，pp.196-210
曹宏 2005〈中动句的语用特点及教学建议〉，《汉语学习》第 5 期，pp.61-67
高秀雪 2011〈再谈汉语中动结构的界定〉，《现代语文》第 4 期，pp.112-116
古川裕 2005〈现代汉语的“中动语态句式”——语态变换的句法实现和词法实现〉，《汉语学报》第 2 期，pp.22-32
何文忠 2005〈中动结构的界定〉，《外语教学》第 4 期，pp.9-14
吕叔湘 1982《中国文法要略》，商务印书馆
沈阳・司马翎 2010〈句法结构标记“给”与动词结构的衍生关系〉，《中国语文》第 3 期，pp.222-237
熊学亮・付岩 2013〈英汉中动句的及物性探究〉，《外语教学与研究》第 3 期，pp.3-12
余光武・司惠文 2008〈汉语中间结构的界定—兼论“NP+V-起来+AP”句式的分化〉，《语言研究》第 1 期，pp.69-78
周晓岩・高腾 2007〈最简方案下的中间结构生成分析〉，《外国语言文学研究》第 1 期，pp.51-55
朱德熙 1982《语法讲义》，商务印书馆
李在鎬 2010『認知言語学への誘い:意味と文法の世界』、開拓社